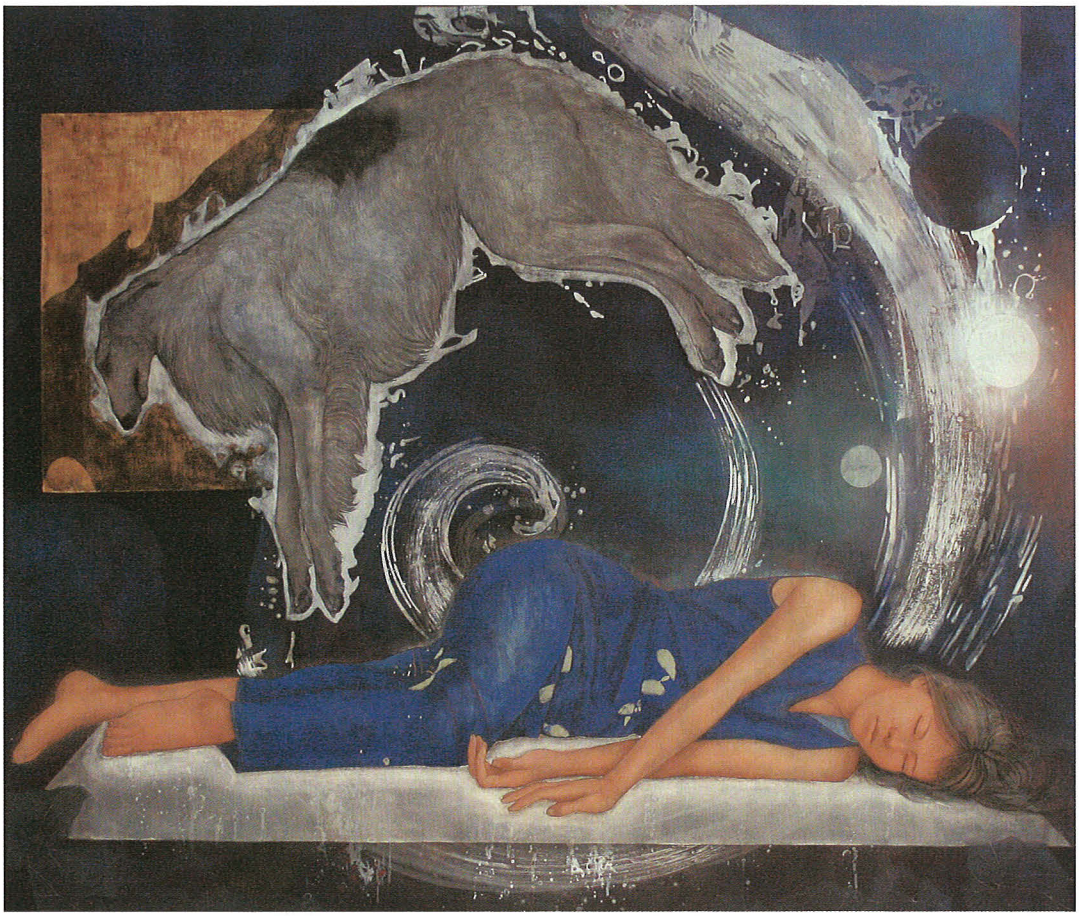
子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2007年1月　NO.135



「宙の行方」 荒木　陽一

〈もくじ〉

高知地方気象台が新たに取り組む業務について…… 仁木伸一　2～3
地域おこしとワークライフバランス…… 川口清史　4
地の名も無き偉人たち①
　土佐人らしい堂々の画風―石川寅治のこと―…… 谷　是　5
21世紀の文化施設と都市政策…… 松本茂章　6～7
高知の女性の生活史
　「ひとくちに話せる人生じゃあない」はこうしてできた
　　～地域を歩いて聞き取りをしてⅢ～…… 市川睦子
　　～地域を歩いて聞き取りをしてⅣ～…… 堅田美穂　8～9
第5回市民ミュージカル『音の旅人』制作開始 …… 大家賢三　10～11
言葉の現場から①…… 井津葉子　12
10～12月の事業のご報告…… 13
風俗歳時記・風伯…… 14～15

(財) 高知市文化振興事業団

高知地方気象台が新たに取り組む業務について

仁木　伸一

高知県は、自然災害を被りやすい地理的・地形的環境にあり、過去には幾多の激甚な災害を被ってきました。その中でも、一九七二年（昭和四十七年）の「繁藤豪雨」が強く印象に残っています。

繁藤豪雨が発生した当日の天気図を見てみますと、日本海の低気圧から前線が対馬海峡を通り、中国大陸東岸に延びています（天気図参照）。前線の前面に流れ込んだ非常に暖かく湿った空気と上空五〇〇〇メートル付近の乾燥した冷たい空気の影響で大気の状態が非常に不安定となり、集中豪雨が発生しました。繁藤では一日の雨量が七四二ミリに達し、年間総降水量の約四分の一の雨が一日で降りました。この驚異的な値をみますと、災害は起こるべくして起こったと言えます。

この集中豪雨の発生には、高知県の地形が大きく影響しています。すなわち、北には東西に伸びる四国山地があり、一方、南は太平洋が広がっています。また、沿岸部は、室戸岬と足摺岬が太平洋に突き出し、その内側に土佐湾を抱く東西に細長い扇状をしています。このような地形は南からの湿潤な空気を集めやすく、繁藤豪雨もこのような地形が大きく影響しました。

なお、一九九八年（平成十年）の「高知豪雨」も同じような気圧配置で集中豪雨が発生しました。

「繁藤豪雨」では土砂崩れにより六十一名の尊い命が奪われましたが、このような災害を防ぐためには、集中豪雨と土砂崩れ発生のメカニズムの間に災害に結びつく幾つかの盲点があることを知っておくことが重要です。

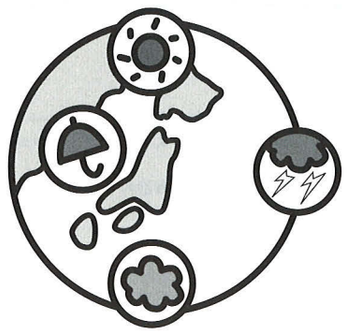
まず、集中豪雨は、平均的に三～四時間の間隔で激しい雨が降り、それが何回か繰り返されます。「繁藤豪雨」の場合も三回繰り返されました。また、雨のピークとピークとの間では、時には日が射すことさえあります。その時に一度避難していた人が家に戻って被災するという危険があります。

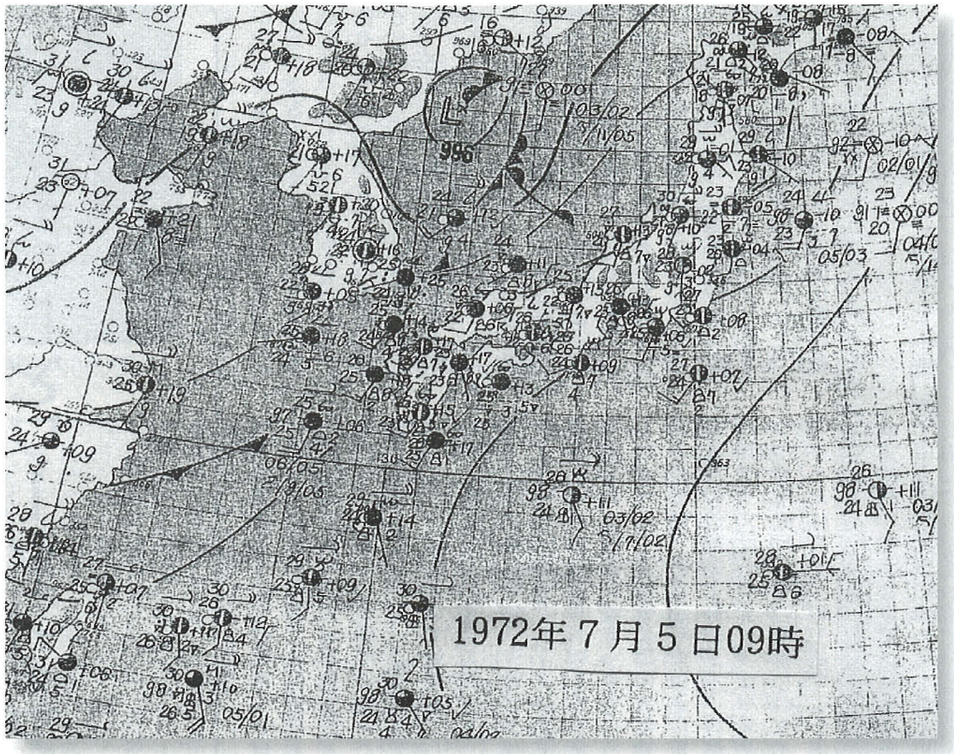
次に、土砂災害の発生は、地質や傾斜度、植生等により異なりますが、少なくとも降雨がおさまっても数時間は土砂災害発生の危険性が残っています。

「繁藤豪雨」では、最初の崩壊で生き埋めになった住民（一名）の方を、雨が弱まったため救助をしていた消防団員が二回目の大規模な崩壊に遭遇し、六十一名という多くの犠牲者を出してしまいました。

このように多くの人的被害を伴う土砂災害から人命を守るため、気象庁では都道府県と共同で「土砂災害警戒情報」を発表することにしています。この情報は、大雨による土砂災害の危険度が非常に高まった時に当該市町村にお知らせして、防災活動や住民への避難勧告・避難指示といった災害応急対応を適時・適切に行えるよう支援し、住民にも自主避難の参考情報として提供するものです。

既に準備の整った都道府県から順次発表を開始しており、高知県では平成十九年の出水期に発表できるよう作業を進めています。





繁藤豪雨時の地上天気図

その他、地方自治体や住民の皆様の防災対策を支援すべく、気象台が新たに取り組んでいる業務について簡単にご紹介します。

1. 市町村等からの長年の要望であった市町村単位での警報発表を平成二十二年度実施に向け作業を進めています。
2. 高知県の管理河川について、県と共同で洪水予報を発表する業務も逐次作業を進めています。
3. 「緊急地震速報」を平成十八年八月一日から適切な利・活用が可能な分野について先行的に提供を開始しました。「緊急地震速報」とは、震源に近い観測点で地震を検知し、直ちに震源位置やマグニチュードを推定し、大きな揺れが迫っていることをお知らせすることを目指す情報で、平成十九年度には住民の皆様にも提供できるよう現在検討しているところです。
4. 台風の進路予報の改善を平成十九年度の台風シーズンから実施します。台風情報の改善の概要は以下の通りです。
   - 三時間刻みで二十四時間先までの台風予報の開始
   - 最大瞬間風速の追加
   - 発達する熱帯低気圧情報の充実
   - 台風から変わった温帯低気圧に関する情報の開始

情報通信技術のめざましい進展により、市町村等へは迅速・的確に情報を提供できるようになりましたが、防災気象情報の精度は、科学の著しい進歩にもかかわらず現状でも八十点のレベルです。特に竜巻などのように瞬発的で局地的な気象現象は予測が困難です。

県民の皆さんの生命と財産を守るために役立つ注意報・警報・気象情報の発信が気象台に与えられた最大の使命です。今後も防災関係機関と連携しながら市町村の防災活動を支援するとともに、注意報・警報・気象情報の精度向上にも取り組む所存です。また、必ず起こる東南海・南海地震の事前防災にも積極的に取り組んでいきたいと考えています。

県民の皆さんから信頼される気象台を目指して取り組んでまいりますので、今後一層のご理解とご協力を賜りますようお願い致します。

（にきしんいち／高知地方気象台長）

地域おこしとワークライフバランス

川口清史

遠くにあっても、ふるさとの行方は気になるものである。路上ライブからメジャーデビューを果たした女性デュオが高知にとどまってがんばるといっているというニュースなどは、高知の若者もなかなかだなと頼もしく思うものであった。

とはいえ、高齢化や人口減少、集落の崩壊、県民所得、工場出荷額の停滞、失業率の高止まりといった社会的経済的な指標は常に全国で最下位を争っており、そうした数字を見るたびに「高知はこれからどうなっていくのだろう、徳島や愛媛は活性化しているのに」と思ってしまうのは私だけではあるまい。さしもの、日本の高度成長の波も四国山脈は越えられなかったというべきなのだろうか。

バブル期の観光、レジャーブームは全国の過疎地を大いに元気付け、期待を抱かせたものであったが、バブル崩壊とともにその期待もしぼんでいる。高知の場合、北海道のように当時の巨額の投資が不良債権として残っているという状況にないだけましなのかもしれない。観光や健康・レジャーは依然として地域おこしにおいて重要な意味を持ち続けるであろう。しかし、バブルのときのように、それが起爆剤になって一気に活性化へ、というわけにはいかない。

高度成長に乗れなかったということは、ポスト高度成長期の成熟社会の今日では、ある意味では逆に重要な地域の競争力とも言える。自然との共生、スローライフ、ロハスといった近年流行している新しいライフスタイルは高知での生活でこそ実現できるものではないかと思わせる。事実、私の知り合いで退職後ご夫婦で四万十川流域に引っ越され、自然と共生する生活を選択された方がおられる。

しかし、誰もがこうした生活を選べるわけではない。何よりも、生活の糧をどうする、という古くて新しい問題がある。決して高所得でなくてもいいが、最低限の生活が保証される所得は必要である。そう考えると、やはり最近話題になっている、ワークライフバランスという言葉が重要性を持ってくる。自然、住宅、さまざまな生活インフラ、適度な文化環境等高知はかなりの水準にあるとおもう。問題は働く場である。これはおそらくは何か特効薬があるわけではなかろう。観光はもちろん、「ごっくん馬路村」に代表される食品加工、林業、工科大学と連携したベンチャー育成、など多様に展開されることになるであろう。そこで共通して求められるのは、質のよい労働力であり、そこでは大学を含む教育の役割が大きい。

私はこれまで、アメリカやヨーロッパでの地域再生の取り組みについて現地での調査を行ってきた。地域おこしに成功した多くの地域の共通した特徴は、大学を頂点とするよい教育機関の集積と、その結果としての質の高い労働力の存在である。その質の高い労働力を求めて企業が立地したり、起業が進んでいるのである。そして、その質の高い労働力が出て行かないだけの魅力あるライフスタイルが可能な地域でなければならない。その意味では、私にもまた、ふるさとにお役に立つことがあるのかもしれない、と考えている。

（かわぐち・きよふみ／立命館総長・立命館大学長）

地の名もなき偉人たち①

土佐人らしい堂々の画風 ―石川寅治のこと―

谷　是

土佐の洋画家の中で、日本の美術史や画壇、画商界に通ずる画人が、どれほどいただろうか。一時的に人気の出た藤田太郎や高島常雄らがいるにしても、あまりに早く死去したし、高橋虎之助、真垣武勝ら長寿組はいたが、人気を博した存在とも言いがたい。濱田葆光、今西中通、幸徳幸衛、山脇信徳、西岡瑞穂らも、中央画壇から見るといささかアウトサイドにいた人々で、上島一司、現在活躍中の奥谷博氏に至っては、まだ近年の人で、歴史的評価を経ているとは言えない。その中にあって、石川寅治だけは、わずかに〝土佐洋画人の面目〟を保っている存在だと言えるのではなかろうか。

石川寅治は明治八年四月五日、高知市桜井町、旧鉄砲町に生まれた。あの辺は、藩政期、鉄砲隊の集団が居住した所で、戦時にはともかく、平常時には土木作業や消火作業に従事する下級士族が住んでいた。父は義忠、母は芳と言ったが、その長男であった。高等小学校から県立第二中学校へ入ったと伝えられるが、その頃から上村昌訓に私的に絵画の指導を受けた。ともかく少年時から絵の好きな子供であったらしい。彼の生まれた鉄砲町は江の口川と菜園場側に分流する横堀川に通じており、大、小の船が出入りする〝土手内〟にあった。寅治は終生、船が好きで、晩年まで海と船を描き続けたが、どうやらこの幼時体験が、終生のモチーフになったようだ。

土陽美術時代の石川寅治

明治二十四年二中を中退し、洋画を志して上京、中丸精十郎の塾にはいるが、不満であったと見えて、上村の紹介状で、本郷の団子坂にあった小山正太郎の不同舎に入門した。ここでは下村為山、岡精一、中村不折らの先輩や、鹿子木孟郎、満谷国四郎、吉田博、中川八郎らの後輩と学ぶことになる。不同舎の教育は、鉛筆により徹底的に風景写生をやることに特徴があり、小山が引きつれて、多摩川などの近郊へ再三、写生旅行をやっているが、寅治もすぐれたデッサン図を多く残している。

明治二十六年、明治美術会に「野鴨」などが初入選、以後同展に出品を続けるが、もう不同舎の俊才として、高く評価され始めていた。明治二十九年、黒田清輝、久米桂一郎、藤島武二、土佐の岩村透らが白馬会を創立し、外光派的な明るい画風を日本に導入、新派、紫派と称された。そのような気風に明治三十四年、吉田博、満谷国四郎、中川八郎、丸山晩霞らと寅治は明治美術会を『太平洋画会』と改称、その中心メンバーとなった。同三十五年十月、大下藤次郎とアメリカへ渡り、二人で水彩画展を開きながら各地を転々、翌年三月資金を得てヨーロッパへ移り、同三十七年六月、帰国したのである。三年に近い〝絵描き行脚〟であった。同四十年に創設された文展には、第一回から出品を続け、二回の「菊」が三等、七回の「港の午後」が二等賞となるが、大正八年の第一回の帝展からは審査員となった。

一方、明治四十年東京在住の画人達により結成された『土陽美術会』では、山岡米華、広瀬東畝、本山白雲、島内松南、乾南陽、竹村渭川、千頭庸哉、小原太衛らと創立委員となり、再三同展を開催、大塚豊らと油絵の分野で気を吐いた。他方大正七年から東京高等師範学校の図画講師を十五年間務め、また文部省教育検定委員などを永年果したが、昭和十八年太平洋美術学校校長に就任、同二十八年には日本芸術院恩賜賞を受けた。

寅治の画風はオーソドックスな写実を基礎に、裸婦や、肖像、風俗、風景画など何でも描く幅広い画域を持ち『台湾の画家』とも言われるほどに、何度も渡台し、同地の風景や風俗を描き尽した。晩年は『港と海の画家』と言われるほどに多くの風景を描いたが『美しい、細かい絵を描くな。力強い、元気のある絵を描け』と主張した。彼の絵は晩年、雲や岬や海の潮などを、強い線で縁取り、印象派的な、明るい色調のものが多い。その意味からも、いかにも土佐の男性的な、骨太の〝男っぽい画風〟を思わす。晩年示現会を創設し、会長となり、戦後の新日展に出品、堂々、日本洋画界の本道を歩いた八十九年であったが、昭和三十九年八月一日に逝去した。

日の当った本道を歩んだ人だから、日本の美術評論家や研究家は、面白くないのか、あまり評伝や関連した文章を書こうとはしない。不遇に死んだ人や、夭折した青年などが、かえって取り上げられることが多い昨今だ。しかしこの〝気宇〟の大きい骨格を有した、寅治の画風などは、最近のチマチマした〝速成画人〟の遠く及ぶところではない。どのような小品にも、画道をひたすら歩いた精進の軌跡と高貴な気品が溢れているからである。

（たにただし／土佐史談会副会長）

21世紀の文化施設と都市政策

松本茂章

◆自治体文化政策への関心

二〇〇六年四月に県立高知女子大学・文化学部の教員として赴任してきた。専門は政策科学で、授業では文化政策学、まちづくり政策などを担当している。そんな僕が今、最も関心を持っているのが、芸術文化を生かした都市政策である。狭い意味の芸術振興策にとどまらず、芸術や文化を通じて地域のアイデンティティ形成や中心市街地活性化を図り、新しい産業を勃興させる……。この都市に生まれ、暮らして良かった、と市民が感じられる自治体文化政策が不可欠な時代になってきた、と考えている。だからこそ、自治体が文化施設を設置する政策は、きわめて戦略的な試みなのである。東京や海外でつくられた芸術を地方に伝えるという福祉配給的な行政では、財政難の状況のなか、もはや今日的ではないのではないか。従来的な思考に基づく文化行政からの離陸が求められている。

上記のような問題意識から、二〇〇六年一月、拙著『芸術創造拠点と自治体文化政策 京都芸術センターの試み』（水曜社）を上梓した。二〇〇〇年四月に開館した京都芸術センター（館長、千宗室・裏千家家元）は京都市の「公の施設」で、一九三一年（昭和六年）に建てられたモダンな小学校校舎をそのまま生かし、新進芸術家の制作室（演劇の稽古場や美術のアトリエなど）に再生させた取り組みである。同市は九億八五〇〇万円をつぎ込んで改装を行い、年間一億九〇〇〇万円の予算（二〇〇五年度）を投入している。文化の東京一極集中が進むなか、文化首都・京都を目指した芸術のインキュベーター（孵化器）づくりである。

◆全国各地のアーツセンターを歩いて

拙著の出版が縁となり、公務員向けの月刊誌『地方自治職員研修』（公職研）誌上で連載させていただけることになった。「施設から見る自治体の〝文化水準〟」と題して、二〇〇六年五月号から全国各地の文化施設を歩き、現状を紹介している。本稿執筆の同年十二月時点で、京都芸術センター、神戸・CAP HOUSE、大阪の劇場寺院・應典院、大阪・精華小劇場、大阪市立芸術創造館、東京・芸能花伝舎、横浜・STスポット、岡山・ルネスホールなどを取り上げてきた。官民協働の試みに注目した踏査なのだが、いつの間にか、閉校になった小学校や古い歴史的建築物を活用した芸術創造拠点の事例紹介が多くなっていった。

神戸・CAP HOUSEは、一九二八年（昭和三年）に建てられた旧国立神戸移民収容所の古い建物を再生して、NPO法人「芸術と計画会議」（C.A.P.）が民間のアーツセンターとして利用している。ブラジルに渡航するために全国から集まった移民たちが一時的に暮らした場所で、部屋がそのまま美術のアトリエとして活用されている。大阪の精華小劇場の場合は、一九二九年（昭和四年）にできた精華小学校の体育館を小さな劇場に変えた。繁華街・ミナミの真ん中に位置している。東京・新宿区の芸能花伝舎は、高層ビルの都庁に近い旧淀橋第三小学校を改装して誕生した。社団法人・芸能実演家団体協議会（芸団協）が新宿区と文化協定を結び、年間三九〇〇万円を支払って借り受け、舞台芸術、伝統芸能などの稽古場として、比較的安価な値段で芸術家たちに貸している。

◆岡山・ルネスホールの試み

紹介してきたアーツセンターは、いずれも都市の中心部にあった。地域の歴史的な文化資源を生かして、往時と現在をつないでいる点がとても興味深い。古い建物は人々の記憶に残され、景観は心のなかに定着している。熟年世代には懐かしい存在であり、自らが生まれ育った都市に対する誇りが形成される。一方、若い世代には芸術創造の拠点となる。文化施設を通じて、世代間にコミュニケーションが生まれてくる。

こうした事例を紹介すると、大都市だからできる……という反応が常に返ってくる。だから本稿では、岡山の事例を取り上げてみたい。大阪に生まれ京都に暮らしてきた僕なので、中国四国についてはあまり詳しくなかった。高知に赴任した機会を生かして、知らないまちを歩きたいと思い、途中の岡山で降りるようになった。〈発見〉したのが、岡山市の中心部にあるルネスホールである。一九二二年（大正十一年）に竣工した旧日本銀行岡山支店の建物で、県が土地建物を購入して改装、二〇〇五年九月に三〇〇人程度のホールが開館した。ジャズなどのコンサートや講演会、パーティーなどに使われている。路面電車の走る道路に面した建物は円柱の立ち並ぶギリシャ神殿のようであり、夜間はライトアップされる。まちに風格を与える。有価証券などを置いていた「公文庫」を改装したカフェは午後十時まで営業している。店内はとてもおしゃれな雰囲気に包まれていた。

岡山・ルネスホール

それにしても、岡山県がなぜこのような施設をつくったのか……。先の大戦で岡山のまちは焼け野原となったが、当時の写真を見ると日銀支店の建物だけがぽつんと残っている。それだけに日銀支店はまちのシンボルだった。このため長野士郎知事時代の一九八九年、同県は建物の保存を目指して日銀から土地建物を買い取った。その後、財政難に見舞われ、ほとんど使われないままになっていたところ、企業人らで構成する市民団体が、飲食を楽しめる音楽ホールが都市文化には必要なのだ、と提言して県を動かす。この主要メンバーがNPO法人バンクオブアーツ岡山（黒瀬仁志理事長）を設立し、県から指定管理者に選定された。黒瀬理事長は青年会議所の元理事長で地元企業の社長さんだ。当時の副知事に面会して一連の政策形成過程を詳しく伺ったところ、岡山城を中心として文化施設が集中するエリアに回遊性を持たせたいと願い、財政難のなか、三億八五〇〇万円をかけて改装して、開館に踏み切ったのだという。まさに文化施設とまちづくりの事例である。

◆高知への期待

県立高知女子大学の教壇に立つようになって九か月が過ぎた。高知は話に聞いていた通り、愉快で異色の人々が多いようだ。人材に恵まれている土地柄である。高知市文化プラザ「かるぽーと」のように真新しい大規模文化施設もできた。ただ、残念に思うのは、歴史的建造物を文化施設に活用して現代に再生させた姿をあまり見かけないことである。先日、岡﨑誠也市長にお会いした際も、こうした率直な印象を申し上げた。中心市街地が空襲に遭ったとしても、それでも残された地域の文化資源を生かしてみたい。NPO法人などと協働し、官民が力を合わせて二十一世紀の新しいタイプの文化施設をつくっていけるのか。地域文化を生み出せるのか。まちづくりと文化施設をどのように関連させるのか。課題は山積している。二十世紀型の「ハコモノ行政」を乗り越えて、戦略的な都市文化政策を実現できれば……と願う。道州制の実現が叫ばれ始めた時代だけに、今後は、県境を越えての都市間競争がいっそう激しくなっていくだろう。都市としての底力が今、問われている。

（まつもとしげあき／県立高知女子大学・文化学部教授）

松本茂章

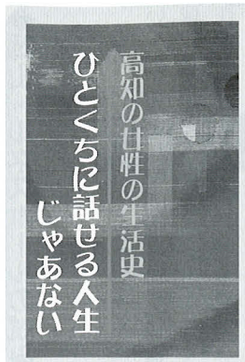
一九五六年生まれ。早稲田大学卒業。同志社大学大学院・総合政策科学研究科博士課程（前期課程）修了。全国紙記者や支局長などを経て、二〇〇六年四月から現職。日本アートマネジメント学会関西部会長。文化経済学会〈日本〉関西支部事務局長。文化政策学会準備会運営委員。

高知の女性の生活史
「ひとくちに話せる人生じゃあない」はこうしてできた

～女たちの歴史を編む～

〈連載第４回〉

高知女性の生活史作成実行委員会



「高知の女性の生活史　ひとくちに話せる人生じゃあない」

地域を歩いて聞き取りをしてⅢ
語り部さんたちとのすばらしい出会い

市川睦子

三年間の間には、訪問した時間の半分を笑いとおしゃべりで過ごした日もあった。また、ご主人との話に花が咲き「（女性史なのに）ご主人に換えようかしら」と冗談を言いあう事もあった。

ソーレでの作成実行委員会（愛称ミモザ）も軌道に乗り、並行して幡多ブロックの取材陣十二名も動き出した。語り部さんは郡内で偏りのないよう心掛けて選んでもらった。

私の担当の語り部さんには、辛い思いをさせた。退職後、体当たりで取り組んでいた、食生活改善の運動をしていた頃を語る時には、資料を山のように積み、メモを広げながら目を輝かせて説明してくれた。が、語ってほしい内容が実行委員会の調整により、第三の〝政治家の夫……〟に決定した時から、思案気に力なく微笑み、口数が少なくなっていった。そして「あの頃の苦労をあからさまに言う事は出来ない。主人にも響き、人様にも迷惑がかかり誤解を生む。私はどういう風に…、どこの辺りまで話してええもんか…」と呟いた。本当の苦労はなかなか話せるものではない。と言いながらも「今頃になって苦労した時代のことが、やっと、夫と話せるようになってきた。お互いに口にも出せなかった胸の内が静かに話せるようになってきた」と語った。私は彼女の澄み切った心中に頷き、未だに口に出す事すら出来ない苦労の数々を思って、文章の締め括りにこの言葉を使った。ここのところ少し体調を崩した彼女に、笑いのいっぱい詰まった八時間に及ぶ取材テープをプレゼントした。いつまでもお元気で過ごして頂きたいものである。

取材の仲間達も、語り部さんが、「花が咲いたから取りに来たや」等と電話を掛けてきてくれるとか、親戚のようになった等と話す。語り部さん達は、いつも快く家族で迎え入れて下さり、赤裸々に語って頂いた。感謝・感謝である。

どの語り部さんも、女性が軽視され、それぞれに重荷を背負った死に物狂いの時代を生きてきた。一人一人の生き様こそが時代を変える原動力だったのだと、完成した〝女性史〟に目を通してみて改めて思った。

〝女性史〟の本は親戚や知人に配られた。古希の祝いや入院見舞いにプレゼントするのだと買いに来てくれた人もいた。涙を拭きながら読んだという感想が、あっちこっちから私の耳にも聞こえてくる。廻し読みをしているというグループも。その他にも、沢山の反響が届く。嬉しい限りである。

私達の仲間は、三年間の締め括りとして、解散式なるけじめの会を持った。その場で、解散するには惜しいとの声もあって、今〝ミモザ幡多〟のままで再スタートしようとしている。立派に出来上がった本を胸に抱き、それに参加する事が出来た満足感がそう言わせているのではないだろうかと思う。

語り部の皆様方から、崇高なる多くのものを学ばせて頂いた。活動の機会を与えて下さった方々にも感謝をしている。

古谷前館長がわざわざ中村の公民館に来て下さり、話を伺った時には、あまりの突然さに、思わず警戒をしてしまった。その時の言動を思うと、今もって赤面の至りである。

文末になったが、取材時に教えて頂いた、環境にやさしい、廃油利用の〝油粕〟の作り方を皆様にもお裾分けしたいと思う。

① 米糠（ぬか）を大きめの容器に入れる
② 台所の廃油を入れ混ぜる（回数適当）
③ ボソボソ具合になったら出来上がり

（いちかわむつこ／幡多ブロック担当）

地域を歩いて聞き取りをしてⅣ
洗濯物をみると安心する

堅田美穂

句作を楽しむ堅田春野さん

「八丁坂」を通学した子ども時代を語ってくださった春野さんの家は国道沿いにある。春野さんの家の前を車で通る時、家の様子をそれとなく見るのが私の習慣になっている。窓が開いていたり、戸が開け放してあったり洗濯物が干してあったりすると、家に居るのだ、今日も元気だなと思い安心する。

昨年の話だが、秋の夕方、農作業の服装で道路脇に立っている春野さんを見かけた。後になって「あの時は、何をしていたのです?」と尋ねると「たまねぎを植えよったがよね」という返事。その時は驚いた。「今年は?」と聞くと、「最近は、足がばたつくのでよう植えちょらん。まだ、古い芽のでかかったがをお汁にいれて食べゆうぞネ。ハイカラな料理をするのがめんどうになって困ったもんよ。作るものいうたら煮物やら味噌汁よね。けんど健康診断では異常無しといわれたぞね。病院の先生には、味噌とジャコがあったら上等言うちょいた」。そう言いながら笑った。

ご主人が出征した時から日記を書いているということだから、そこには六十年以上の生活が記録されていることになる。春野さんの昭和の歴史があり、平成も十九年を迎えようとしている。これからも日記が書きつづけられていくことを願いたい。

久しぶりに電話をすると喜んでいただいた。最初は低かった声が、だんだん張りのある元気で大きな声に変わってくる。世間話をしながら、声を聞きながら、誰かと話すことの大切さを考えてしまう。

語りがコラム記事になっている春水さんのお宅は、国道からかなり入り込んでいる。したがってそこを通ることはめったにない。けれども、何かの用で通る時は、やはり洗濯物が干してあるか、人の気配があるか家の様子が気にかかる。春水さんの家を何回目かに訪問した時、昼食会を友人たちとするというので、そのお宅へ行き飛び入りでご馳走になった。

「私らは、友だちどうし何かというと集まって、話をしたり、歌ったり、講演を聞きに行ったり、旅行したり、料理を作って食べたりします。今日は○○さんの退院祝い」。

ごちそう作りに集まった大西春水さん（中央）と友人たち

集まっているのは同じ集落の六人。最高齢の方は九十歳。食事をしながらの昔の話、現在の社会評、たくさんの話を聞くことができた。私一人が聞くにはもったいない話ばかりであった。どの方にも、語りたいことがたくさんあるのだと思った。聞いておかねばならないことがたくさんあるように思った。

一人暮らしになっている高齢者は多い。でも、近くの者どうしが集まれる範囲で集まり、お互いに楽しめる時間を自分らで作り出せるのはなんと素敵なことか。その日以来、春水さんの友人宅にも洗濯物が干してあるかどうか気になるようになった。洗濯物が干してあるのは人がいる証拠だと思って。

（かたたみほ／高岡ブロック担当）

第5回市民ミュージカル

音の旅人

Musical Oto no Tabibito

制作開始

大家賢三

◆九年ぶりの市民ミュージカル

高知市文化振興事業団はこれまでに市民参加のプログラムとして、市民ミュージカルを四本制作してきました。今から十七年前の平成元年、第1回として『ミュージカル・RYOMA』を上演しました。今ほどミュージカルについて一般的ではなく、スタッフや出演者も手探りの状態でした。この数年前に事業団が開催した「龍馬音楽祭」が切っ掛けとなり、市民ミュージカルに繋がったのです。現代の若者が龍馬の生涯を追体験するというストーリーで、約百人の若者たちが舞台狭しとその情熱をぶつけ、大変ご好評を頂きました。

平成四年には津野山一揆に題材をとった『ミュージカル津野山物語』を檮原町と共催しました。平成八年には、赤岡町に住んだ幕末の絵師・金蔵にちなみ『ミュージカル絵金』を制作、四本目は今から七年前の平成十一年、『ミュージカル光の中で…』を上演しました。いずれも高知に題材を求め、出演者やスタッフは地元高知の方々の参加を得て進めてきました。

今回のミュージカルの本番は平成十九年二月を予定しており、前回作品から九年ぶり、『ミュージカル・RYOMA』から数えても足かけ二十年になろうとしています。

これまでに多いときには百人近い参加者をまとめ、十か月以上の稽古を行わねばならず、その制作体制は常にぎりぎりの状態でした。また、私どもが管理・運営している高知市文化プラザの開館準備などが重なり、前回の『光の中で…』以来、七年近く間があいてしまいました。

◆市民ミュージカルとは

私ども文化振興事業団は、市民の方々と様々な文化事業を作り出し、市民の文化活動を推進していくことを仕事としています。いまこの市民ミュージカルの制作が始まり、事業団としても気分も新たにしているところですが、なぜ市民ミュージカルなのでしょうか。

この十年の間に「ミュージカル」という言葉は、すっかり市民権を得て、一般的にも知られるようになってきました。ミュージカルは演劇・ダンス・歌唱が一体となった舞台芸術であり、より多くの参加者を集めることのできるプログラムではないかと思います。市民の方に舞台芸術への関心を持ってもらえたり、幅広い年齢層の方々と稽古で知り合えたり、あるいは高知を舞台とする作品が郷土の再発見に繋がったりといろいろな面で、意義が見いだせると思います。

手探りで始めた市民ミュージカルでしたが、この間、参加者の中から演劇に携わり、子ども劇団を運営したり、一般の劇団を旗揚げする人も出てきました。市民ミュージカルが切っ掛けとなって、何らかの形で演劇と関わり、また芝居やダンスの楽しさを知り、実生活の中でも取り入れて生活する人が増えてきたと思います。

高知市文化プラザは高知市の文化の拠点施設として軌道に乗り、今年は開館五周年を迎えます。『音の旅人』はその記念事業として、十九年度自主事業の目玉として開催し、事業団が総力を挙げて取り組みます。

ミュージカルの一場面を歌って踊るワークショップ

◆テーマは「よさこい」と「武政英策」

今回のミュージカルも、地元高知に題材を求めています。いまや高知の文化財産として全国的な広がりのある「よさこい（祭り）」とその生みの親で戦後高知で音楽家として生きた「武政英策」をテーマとして、高知を描きます。

「武政英策」の名前を知っている方はいまどれくらいいるでしょうか。武政は愛媛県に生まれ、山田耕筰に師事して作曲を学び、NHK京都放送局和洋管弦楽団指揮者や京都太秦で映画音楽の作曲も手がけた人物。終戦間際に妻の実家・高知へ疎開し、戦後は「土佐の男」として高知で音楽活動を行い、昭和五十七年、七十五歳で亡くなります。ペギー葉山の「南国土佐を後にして」の作者として知られていますが、昭和二十九年に始まった「よさこい鳴子踊り」の生みの親でもあります。

戦後の混乱の中で、地元の若者たちに音楽を指導し、武政のもとに多くの青年が集まりました。いくつものアマチュアバンド結成を支援し、「バンドは民主主義だ」という言葉も残しています。戦後復興のなかで文化に飢えていた地元高知の若者たちに音楽を通じて希望を与え、彼らの情熱に手弁当で応えていきました。

民謡・童唄にも関心をよせ、県下各地で歌の採譜を行っています。また、武政はよさこい鳴子踊りの作詞・作曲・振付のアイデアを考え、「よさこい鳴子踊りにしても、時代や人によって変わってきたし、これからもどんなに変わっていってもかまわない」と述べています。

昨年12月の市民ミュージカル制作発表の様子

そんな武政の「自由に音楽を愛する心」や、武政が生きた同時代の人々を、〝高知がまだ若かった頃〟の人々が賢明に生きていた時代を、よさこい鳴子踊りの変遷や実際のエピソードなども織り込みながら、ミュージカルとして描いていきます。

◆オーディションに参加し、新しい自分発見！

すでに武政さんと親交のあった方々十数人に取材し、それをもとに現在脚本家の高橋亜子さんが上演台本を執筆しています。エピソードなどは盛り込みますが、基本的にはフィクションとして描きます。また高知国体のジュニアミュージカルでお世話になった、大原晶子さんと小川美也子さんに演出を、作曲も様々な舞台を手がける玉麻尚一さんにお願いしています。プロとの協働作業により、地元スタッフや参加者は様々なノウハウや考え方を学んでいき、芸術レベルの向上や人材育成にも繋がるものと確信しています。

三月四日（日）には、オーディションを行い、出演者を選考します。オーディションだけ受けることもできますが、それに先立ちオーディションの課題を稽古するミュージカルワークショップも一月から二月にかけて開催します。

市民ミュージカルは経験のある人もない人も、稽古という共同作業を経て等しく同じ舞台に立つことを目指すものです。その過程で新しい自分を発見したり、年代・性別を超えて他者との交流を図っていくことができるものです。舞台芸術が参加している人々の人生と交差し、そのことによってさらに見ている観客が舞台芸術を身近なものと感じていく。そんな環境を提供することも文化施設の重要な役割と考えています。

演出家・蜷川幸雄さんの「ゴールドシアター」のように、全国から何百という高齢者が舞台に立ちたいと集まる時代です。演劇やミュージカルは決して若者だけの専売特許ではありません。気力が充実し、何かを求めていこうとする心意気を持った方々は数多く存在すると思います。

そんな方々との新たな出会いを心待ちにして、この市民ミュージカル『音の旅人』は一年後の上演へむけて、いま始動し始めたばかりです。多くの皆様のご参加と、このプロジェクトへのご協力をお願い申し上げます。

（たいけけんぞう／(財)文化振興事業団企画事業課）

言葉の現場から①

井津葉子

「『局アナ』は放送局からお給料をもらっている『局付きタレント』と思ってないでしょうね。『アナウンサー』という肩書きで放送に出る以上、新人といえども『プロ』、正しい日本語・分かりやすい日本語・美しい日本語を話す責任があります」

これは新人アナウンサーに対してよく使う『脅し文句』です。実際のところ、放送部に所属したり、専門の学校に通ったりしてアナウンスの勉強をして来ていても、始めは敬語も使いこなせない事がほとんどなのです。

それどころか「助詞を間違う」「主語と述語が合わない」「ボキャブラリーが少なくて表現がワンパターン」。少し仕事に慣れてきてからも「台本に書かれたことはきれいに話せるけれど、とっさのアドリブができない」「インタビューをする時何を聞いたらいいか分からない」「相手の答えに反応できない」と課題は続きます。

散々な事を書きましたが、もちろんこれは今の新人『M君』のことではなく、中堅やベテランと言われるようになった先輩アナウンサーも、ほとんどかつてはこうだったという事ですので、誤解のありませんように。

そうして出来ない事だらけの自分にショックを受け、「何をしゃべって良いのか分からなくなる」「マイクを持つのが怖くなる」というのが、多くのアナウンサーが通る道。私だって、一応、神経性胃炎になったこともあるのです。でも、そうやって恥をかき、失敗を繰り返すうち、徐々に安心して聞けるようになってきます。

それにしても、仮にもアナウンサーを志望する若者ですからおしゃべりは苦手ではなかっただろうし、それなりの勉強もしてきているのにどうしてなんでしょう?

おそらく、私たちの多くがそうなんでしょうけれど、それまで日常会話の中で言葉の誤りを注意されたり、困ったりすることがなかったって事じゃないでしょうか?

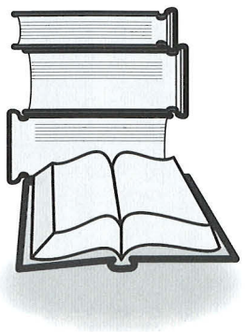
現代人の生活では、人と面と向かって「会話」でコミュニケーションするということが少なくなりました。買い物も『自販機』や『通販』に『ネットショッピング』。『スーパー』『コンビニ』も会話は要らない。『電話』も一人一人が携帯を持ち、しかもメールのやりとりが主になっている。気を使わないでいい家族や友人と話すぐらいでしょう。学校教育の場でも、国語の時間で作文の指導はあっても会話の指導はないですね。せいぜい音読ぐらいでしょうか。

機会がなければ技術は磨かれません。たまの事だと硬くなってしまって言葉も出てこないし、間違いもする。ますます自信をなくしてしまって、マニュアル化された言葉に頼るしかなくなるのも分かりますし、学生が社会に出て最初に壁にぶち当たるのが言葉の問題ということもうなずけます。

今『言葉を磨く』場作りが必要です。国際化の時代『外国語会話』の勉強をする人が多いですが、本当はその前に『日本語会話』をトレーニングしないといけないのではないでしょうか。

『言葉の現場から』、次回は、多くの人が危機感を抱いていらっしゃるだろう『敬語』について考えてみたいと思います。

（いづようこ／㈱高知放送報道制作局アナウンス部長）



高知市文化プラザ かるぽーと 11～12月の事業のご報告

四度目となる今回は期間を三日間に拡大し、上條淳士&正木秀尚トークショー、まんが100sec.バトル、矢野徳・功兄弟まんが教室、村岡マサヒロすみっこで会いましょう、置鮎龍太郎トークショー&サイン会、LIVE.COS（アニメソングコスプレライブ）、こみっくフォーユー（同人誌即売会）など多彩なイベントを行い、親子連れを中心に延べ一万人が訪れ大盛況となりました。

◆矢野徳・功兄弟展

十月七日～十二月三日、横山隆一記念まんが館で、龍馬学園創立二十周年記念「矢野徳・功兄弟展」を開催しました。

高知県出身のまんが家・矢野兄弟の作品を一コマまんがを中心に、新聞挿絵、絵本、似顔絵など、幅広く展示。一四三六人が来場し、その個性的で多彩な作品群を楽しみました。

十一月三日には「まんさい―こうちまんがフェスティバル2006」に合わせて矢野兄弟が来館。まんが教室や似顔絵コーナーなど、多くのイベントで来場者と交流しました。

◆まんさい　こうちまんがフェスティバル2006

十一月三日～五日、「まんさい―こうちまんがフェスティバル2006」を七階市民ギャラリーほかで開催しました。

◆ミュージックストリーム2006

十一月五日、「ミュージックストリーム2006」を大ホールで開催しました。三回目の開催となるこの催しは、四国や全国の音楽コンクールで優秀な成績を収めた県内音楽団体の活躍を市民に紹介する演奏会で、今年は土佐女子中学高等学校コーラス部、西高等学校吹奏楽部、三里中学校吹奏楽部、ユングコーラスの四団体が出場し、素晴らしい演奏を披露しました。

◆2006冬のまんが体験イベント「まんがで遊ぼう!-クリスマスイブイブ」

十二月二十三日、横山隆一記念まんが館まんがライブラリー2で、「まんがで遊ぼう!-クリスマスイブイブ」を開催しました。

「まんがクリスマスカードを描こう」「まんがカレンダーをつくろう」「オリジナル缶バッジをつくろう」といった体験コーナーに多くの子供が訪れ、楽しい時間を過ごしました。

◆アーティストバンクプログラム Vol.5 ライブパレット

十二月二十二日、アーティストバンクプログラムの第五弾「ライブパレット」を小ホールで開催しました。

今回はアンサンブル「プルミエ」、高知ファミリーコーラス、高知葉風会の三団体が出演し、クリスマスをテーマにした楽しい曲を数多く演奏しました。公演の最後には器楽・声楽・邦楽の枠を超えて「きよしこの夜」の合同演奏を行い、来場者のクリスマス気分を盛り上げました。

第17回 高知出版学術賞 推薦募集

「高知出版学術賞」は当該年における最も優れた学術出版を顕彰し、学術研究の振興を図ることを目的とした賞です。皆さまからの該当図書のご推薦をお待ちしています。

【対象】

次の事項をみたすもので、高知出版学術賞審査委員会に推薦されたもの。

①高知県在住者の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。

②二〇〇六年中（奥付の日付による）に発行された単行本。

【推薦】

自薦・他薦を問いません。所定の推薦書に必要事項を記入し、該当図書二冊を添えて、審査委員会まで提出してください（図書は返却しません）。なお、推薦書はご請求いただければお送りします。

【締切】

平成十九年一月三十一日

【表彰】

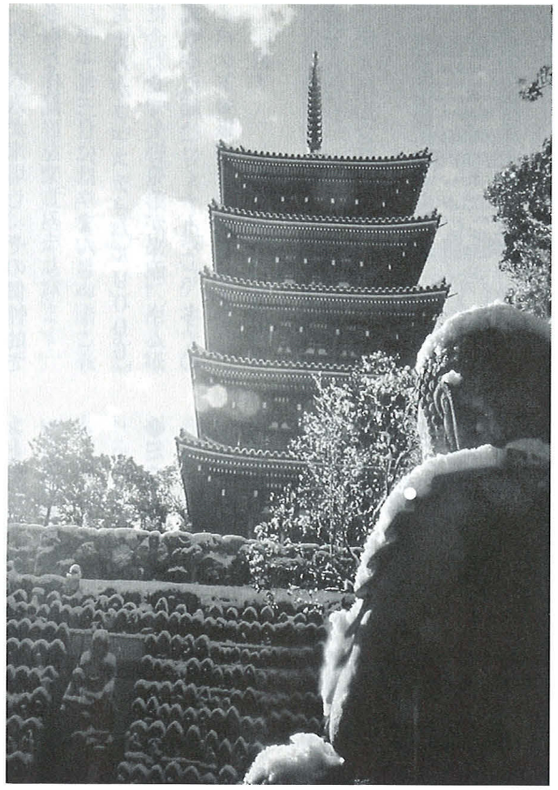
三点以内とし、それぞれの著者または編者に賞状と賞金十万円

【推薦・お問い合わせ先】

㈶高知市文化振興事業団内
高知出版学術賞審査委員会
TEL〇八八―八八三―五〇七一

高知を撮る

第22回写真コンテスト入賞作品



朝日に温む（平成17年　五台山）

木村　登

朝日と共に仏像の雪化粧が徐々に
薄らぎ、温もりの表情が見えてくる。

「アンチ・エイジング医学」

一九九〇年に、アメリカで、〈抗老化医学〉、〈長寿医学〉が誕生して以来、〈若さ〉に価値をおくアメリカ社会では、若返りや老化防止をうたった、あやしげな製品を、インターネットで売りつける業者が急増して、物議をかもしている、という。

ここ数年来、日本のテレビ・コマーシャル、新聞の折り込み広告、インターネット業界にも、この傾向が反映されているように思われる。

日本が世界に例をみない猛スピードで、高齢化社会に突入すると、この種の問題に対する世人の関心が高まり、それに伴って、〈アンチ・エイジング（抗加齢／抗老化）〉というカタカナ英語が、流行の兆しを見せている。

アンチ・エイジング医学と関連した用語として、アンチ・エイジングクリニック、アンチ・エイジングドック、アンチ・エイジングサプリメント、アンチ・エイジング化粧品など。

アンチ・エイジング医学は、生活の質の改善と健康長寿を目指す予防医学であり、①加齢や老化のメカニズム究明のための基礎研究、②加齢者の診断法の確立、③高齢者医療の三つが主体となる。

これらの目的を達成するための具体策としては、筋重量・骨密度・体力・活力の増加、体脂肪の減少、免疫力・コレステロール関連データ・肌つや・気力・睡眠の改善などが挙げられる。

現在、日本抗加齢学会（二〇〇一年設立）とNPO法人日本抗加齢協会（二〇〇三年設立）が、研究と学術研究の中心を担っている。

参考書＝『別冊日経サイエンス147―エイジング研究の最前線』、『南山堂医学大辞典』ほか。

（路）

風俗歳時記

高知遺産

肩身が狭い？ リョウマさん

以前に比べるとずいぶん少なくなったけど、高知の街にはリョウマさんがあふれてる。いつの頃からこうなったのかは分からないけど、看板、お土産、会社名とあちらこちらに竜馬龍馬りょうま。お土産屋さんでは今も龍馬像が主役だけど、最近はやなせたかしさんのキャラクターに押され気味で、どうにも肩身が狭そうだ。まあ、使い過ぎは良くないですよ、使い過ぎは。（竹村直也）

風俗

結婚できない男

こんなテレビドラマがあったが、それとは関係ない。むしろ「結婚したい男」というべきかもしれない。極めて個人的な話になるが、離婚してすでに二十年近く経つのに、いまだに結婚できないでいる。結婚する前は自炊をしていたので、食べることにはあまり不自由は感じないが、いつまでも結婚を前提としたいのは、なぜなんだ！と、思うようになった。

私はよく人から「かわっている」といわれる。これは「ヘン」つまり「変態」という意味ではなく「他人と違っている」「少々気難しい」という意味のようだ。それも最近ではそうとう能天気に生きているし、こんなことで結婚の機会を遠ざけてしまっているとは思えない。

そもそも一度は結婚できているわけだし、息子と娘もリッパに成長してくれている。これは相手のおかげという部分がほとんどだが、それにしても身体的にことさら問題があるわけでもないし、見栄えもまあ十人並みかも知れない。収入だって極端に少ないとはいえない。女性には優しいし、思いやりもないとはいえない。条件として決して悪くはないと思うのだが……。

妙に言い訳じみているのが哀しいが、現実は現実で、やはり当分のあいだ相手が見つからない、妙に侘びしさと寒さが募る冬ではある。（朝曇改め冬囲）

特定の相手ができないのは少々侘びしい。

結婚したくない理由はないし、むしろ結婚したいと願っているのに、いたずらに月日ばかりが流れている。これまで、そのことを真剣に考えたことはなかったが、周りの男たちが、離婚してもすぐ新しい相手を見つけてさっさと結婚しているのを見るにつけ、結婚できな

第151回 市民映画会

「戦場のアリア」

歌声は国境を越えて、懐かしい故郷と愛する家族を思い出させる。
戦場に響く素晴らしい音色が引き起こした、心温まる奇跡の物語。

「幸せのポートレート」

「あなたにとって、理想の恋愛、結婚、そして幸せとは？」…そんな切実な問いかけに、「私が本当に求めているものはこれ」と迷わずに答えられますか。
"理想"の幸せをさがす、あなたのストーリー。

と　き：2月9日(金), 10日(土)
ところ：高知市文化プラザ かるぽーと大ホール

上映時間（両日とも）	
戦場のアリア	①11:50②15:45③19:40
幸せのポートレート	①13:55②17:50

料　金：一般前売り1,300円(当日1,500円)
割引(前売り・当日とも)1,000円
※学生証、長寿手帳、障害者手帳などをお持ちの方は割引料金
※前売り券は、かるぽーとほか市内各プレイガイドおよび指定のサニーマートで販売。
※お問い合わせ:㈶高知市文化振興事業団企画事業課(088-883-5071)

今号の表紙

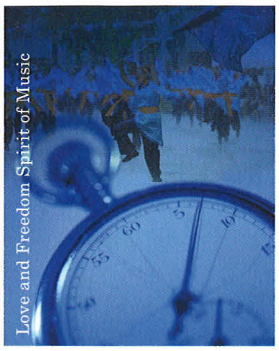
「宙の行方」

荒木 陽一

日本画で使う群青という青い岩絵具は、天然岩石では銅鉱床から産出される藍銅鉱という鉱物から作られる、とても発色が綺麗な絵具だ。この絵具を焼くと黒群青という深い黒色になる。それらの絵具をメインに宇宙と夢をテーマに描きたかった。

色もテーマもファンタジー色が強くなりすぎる危険があったが、犬や人物の描写が崩れないように注意して制作した。

（あらき よういち／高知県展日本画部無鑑査）



高知市文化プラザ開館5周年記念事業　武政英策生誕100年記念
第5回高知市民ミュージカル「音の旅人」
オーディション・ワークショップ参加者募集

Musical Oto no Tabibito

音の旅人

財団法人高知市文化振興事業団では、2008年2月に通算5作品目となる新たな市民ミュージカルを上演します。1999年に上演した『光の中で…』以来約9年ぶりとなる今回の作品は、高知の文化財産として今に繋がる「よさこい祭り」の基礎を創り上げた武政英策を通じて、現代に生きる我々が引き継ぐべき「自由に音楽を愛する心」を、現在と過去を織り交ぜ、ミュージカル作品として表現します。
市民ミュージカルは経験のある人もない人も、稽古という共同作業を経て、等しく同じ舞台に立つことを目指すものです。その過程で新しい自分を発見し、世代を超えた交流のなかで、ひとつのものを創り上げる喜びは、何よりも得難いものになるはずです。オーディション、ワークショップのご参加をお待ちしています。

ワークショップ募集要項　Workshop

オーディションで使用する楽曲の歌唱・ダンス指導を中心としたワークショップを行います。オーディションを目指す方はもちろん、ワークショップのみのご参加もOKです。
また、この期間に小学3年生から中学3年生までを対象にしたこどもコースも合わせて行います。ワークショップを通じて、ミュージカルの楽しさをぜひ感じてください。

■募集対象	一般コース：15歳以上（2007年4月1日現在、中学生は除く）／こどもコース：小学3年生～中学3年生
■募集人員	一般コース：50名 ／ こどもコース：30名
■開催日	一般コース：1月13日（土）～2月25日（日）全8回 ／ こどもコース：1月13日（土）～2月24日（土）全4回
■会場	高知市保健福祉センター、高知市文化プラザ、高知県民文化ホール
■講師	大原晶子、小川美也子
■参加費	一般コース：8,000円 ／ こどもコース：2,000円
■申し込み方法	ただいま電話にて受付中です。参加費は、ワークショップ初日に会場でお支払いください。

オーディション募集要項　Audition

■募集対象	15歳以上（2007年4月1日現在、中学生は除く） ※演劇・ダンスの経験は問いません。高知市以外の方も応募できます。 ※小中学生の応募については、2007年4月以降に改めてご案内します。
■募集人員	50名
■内容	課題曲1曲の歌唱およびダンスによる選考
■開催日	2007年3月4日（日）※時間は申し込み後に改めてお知らせします。
■会場	高知市文化プラザかるぽーと11階大講義室・軽運動室
■募集期間	2007年1月13日（土）～2月25日（日）
■参加費	オーディションのみ参加の場合、資料代ほか諸費用として1,000円をいただきます。 オーディションに向けたワークショップにご参加の場合、無料（ワークショップ費用8,000円に含まれます）。
■応募方法	オーディション参加申込書に必要事項を記入の上、参加費と合わせて高知市文化プラザ8階企画事業課までお持ちください（受付時間9:00～20:00、月曜休館）。 郵送の場合、現金書留にて参加申込書と参加費を同封の上、〒780-8529高知市九反田2-1高知市文化プラザ「市民ミュージカル」係までご送付ください。 オーディション参加申込書は県内文化施設等で配布の他、高知市文化プラザのホームページからもダウンロードいただけます（http://www.bunkaplaza.or.jp）。

お申し込み・お問い合わせ：財団法人高知市文化振興事業団 088-883-5071

文化高知 No.135 2007年（平成19年）1月1日発行 ［隔月発行］
財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL（088）883-5011（代表）／郵便振替01680-5-14869